

金関丈夫の民俗研究

中 生 勝 美

I はじめに

金関丈夫は、知の巨人であった。台北帝国大学の医学部解剖学教室主任教授として形質人類学を専門にしながら、民俗、民族、考古の総合的な人類理解を目指していた。そして文人としても、和歌集の選者だけでなく、エッセイの達人でもある。蔵書を見れば日本文学関係も多く、古典文学から日本史まで、単なる趣味を越えた造詣の深さに驚かされる。

『民俗台湾』を論じた最近の論考では、植民地批判の一環として金関丈夫を植民地主義者と非難しているものもあるが¹、金関丈夫の全体像を把握せず、言論統制下の台湾総督府で、検閲をかいくくりながら出版を続けた努力を見過ごした論評である。

金関は、師匠である清野謙次から、偉人は一生のうちに三つくらい仕事をするものだと言った。清野は、その例としてドイツの近代病理学の創設者ウィルヒョウは、病理学以外に、人類学の分野での成果を上げたうえ、ビスマルクを恐れさせた進歩的政治家にもなったと話されたので、金関は、自分の仕事を、第一に病理学者、第二が人類学、第三は考古学をやりたいと述べた(金関 1979: 29)。金関丈夫は台北帝国大学医学部に所属しながら、一流の文人として幅広い文筆活動を続け、森鷗外が医者であると同時に文学者であったような、ひとつの専門にはおさまらない知の巨人であった。

2011年9月に、国分直一の蔵書が台湾大学附属図書館に寄贈されて国分文庫になったのに続き、国分の師匠である金関丈夫の蔵書も2013年5月には同所の文庫となり、知の巨人の基礎となった知的背景があきらかになった。本稿では、この文庫の位置づけを理解するためにも、彼の著作から特に民俗学、民族学の方面の貢献を解き明かしていきたい。

II 国分直一から見た金関丈夫

国分直一が、最初に金関丈夫と出会ったのは、国分が京都帝国大学文学部に在学中の1930年に、金関が調査した北海道アイヌのスライドを上映したときのことである。その後、国分は学生運動に没頭し、そして台南第一高等女学校に勤務したが、この時代は特に交流がなかった。国分は、1939年に、高雄近くの高橋行溪の大湖貝塚から黒

陶が出土したのを発見し、台北帝国大学の専門家に連絡した時、金関丈夫が移川子之蔵と宮本延人を伴い発掘現場にやってきて再会した。出土品の鑑定をしていた時、金関は黒陶に注目した。それは、金関が当時から中国と台湾との貿易に関心を持っていて、北京大学の斐文中との交流からそうした方面の知識を持っていたからだった（安溪・平川編 2006：256）。

金関の本来の専門は、古人類の形質人類学であるが、考古学にも関心が深く、国分との台湾先史時代の議論を通じて『民俗台湾』で国分を中心とした台南特集を考えた。そこで、国分は『民俗台湾』の創刊号から執筆陣に加わっている。

金関と国分は、台湾先史時代の議論に基づき、台湾の黒陶文化が江南の良渚文化に近似するすると考えていた。1948年に北京大学学長の傅斯年が台湾大学の学長として赴任した。安陽発掘調査の指導者、李済も安陽発掘資料とともに、安陽の研究グループを引き連れて中央研究院に赴任してきた。その研究グループの薫作賓は、金関と国分の仮説を支持した（熊本大学文学部考古学研究室編 1996：23）。金関は、台湾の考古学発掘品と中国南部のそれとの関連性を考えるため、中国やハノイの極東研究院の発掘調査報告などを比較していた。

金関は、江南やベトナムの古代文化と、台湾の先史時代のつながりに関心を持っていた。金関が1942年に海南島特務部から調査の依頼を受けて海南島に行ったのだが、海南島の漢族と黎族の調査経験は、金関の中国大陸と台湾、沖縄の先史を考える上で重要な参照点となっている。

学問上だけでなく、国分は公私ともに金関を師と仰いでおり、戦後台湾大学での留用期に金関宅の離れに下宿し、身近に生活していた時の話は興味深かった。台湾大学に留用された日本人が作った『回覧雑誌』に、金関が国分を描いた絵には、国分の人柄がよく出ていて、実直な国分を金関が可愛がっていたことが表現されている。また国分も、金関を人間として大変尊敬していた。筆者が1999年3月に国分を訪ねて台湾時代の話をつたったとき、『民俗台湾』をめぐり、若い人たちが金関を批判することに、大変立腹して、次のような話をしてくれた。

戦後、金関の蔵書をアメリカの大学が購入してくれることになり、当時の金額で3年分くらいの年収の金額で購入してくれた。金関は自宅に帰り、風呂に入ったが、後をつけてきた泥棒に、その現金をそっくり盗られてしまった。その時に金関は、不平も何も言わず「泥棒も大金で喜んでいるだろう」とあっさりしていた。またその時の奥さんの対応もすばらしく、現金が盗まれたことを、一言も不満を言わなかったという。

現在、台湾大学に所蔵されている金関文庫の書籍は、戦後に集めたものであり、戦前の蔵書はアメリカと沖縄に渡っている。アメリカに渡った蔵書は、ジョージ・カー（George Henry Kerr 1911-1992）の仲介で譲渡されたものだった。カーは、戦前台北高等商業学校の英語の教師だった。金関は台北帝大在職中に、カーの訪問を受けたこと

がある。戦争が終わって数カ月、突然カーが金関を訪ねてきた。彼はアメリカの台湾通として台湾爆撃作戦の中枢にいて、台北を爆撃するとき、金関丈夫や浅井忠倫は貴重なコレクションをもっているから、二人が居住する地域を攻撃目標から除いたと話した。そうして戦後の交友を再開した。二二八事件が起きた時、カーは外交官として台湾人の立場で事件を本国に報告しており、そのため身辺が危なくなって急遽本国へ帰国した。アメリカではワシントン大学東洋学の講師となったが、台湾で彼の名前はタブーだった。1949年に金関が台湾を引き揚げるとき、書籍と陶器のコレクションを持ち帰れないので、陶器をカーに譲ることになった（金関 1978c:61-64）。カーを研究している泉水英計氏の教示によると、パークレーにKanaseki Collectionが台湾本18000冊あるというが、スタンフォード大学にもKanaseki Collectionがあり、金関はカーに二回に分けて蔵書を譲渡したと思われる²。

沖縄に渡った金関文庫の経緯を、金関は次のように書いている。台湾で終戦を迎え、金関は自分の蔵書を持ち帰れないと諦めていた。その頃、日本で柳田国男が發起して沖縄関係の論説集を出版し、その印税収入を沖縄図書館の復興に使う企画を聞いた。金関は台湾に留用されて参加できないので、せめて自分の沖縄関係の蔵書を沖縄図書館へ寄贈しようと考えた。そこで自分の蔵書以外に、日本に引き上げる人たちの売った沖縄関係の本を買い集め、沖縄に引き上げる人に託して沖縄へ運んでもらった。しかし戦後しばらくして、金関が寄贈本の行方を確認すると、寄贈した本は沖縄に搬送されたのだが、その大半は散逸したと知り落胆した（金関 1978c : 39-42）。このあたりの事情も、前述した泉水氏に金関文庫の移転の経緯を教示してもらった。川平朝申がアメリカ軍政下の沖縄民政府に勤務していた時、民政府立図書館を再建して、一時期金関文庫を保管していたが、文庫はそこから那覇琉米文化センターに移り、その後継は那覇市立図書館となり、そこに散逸を免れた金関文庫があるという。書籍の蔵書印から金関本だとわかるけれど、未整理のまま倉庫にある可能性があると言う。金関の蔵書は、合計4か所に分散しているが、その最大のものが台湾大学に所蔵されている。

Ⅲ 学問と人格形成

台湾大学図書館で整理された金関文庫のコレクションを見ていると、とても形質人類学者の蔵書とは思えない。金関の関心は多方面にわたっているが、基本的に文学や歴史の資料が中心である。このような例は、森鷗外やチェホフもあり、彼らが医師と文学の二足のわらじをはいていたように、金関は解剖学と民族学・人類学の双方を専門にしていた。

金関の学問形成過程は、エッセイの中で述べられている。金関の最も幼少の時の記憶は、生まれ故郷香川の榎井村（現在は琴平町に編入）で父の背中に負われて見た人

形芝居だという。人形使いは、農閑期を利用して四国の村々を回る阿波か淡路から来た農民だった。子どもたちは春の訪問者として楽しみにしていて、金関はこの人形劇、そして馬芝居の巡業への興味からはじまり（金関 1978a：13-19）、長じて歌舞伎や狂言、古典文学、俳句へと関心が広がった。

金関の読書歴は、小学校に上がった時に漢学の先生から「浦島太郎」をもらったのが最初だった。その後、母が読む小説を内緒で読み、小学6年生の時に岡山へ移って、岡山県立図書館を利用し始めて読書への渴望が癒されたという。そこからおとぎ話集や小説、落語の雑誌などを読んで、落語にも精通した。郷里が義太夫の盛んな地域で、父母が芝居好きなので演劇関係の記事も読み、芝居の名せりふなども暗誦するほど芝居にも精通した。乱読で図書館の味を知り、昼間の時間では存分に読めないもので、こっそり夜図書館へ行って閉館までいて、父にひどく怒られた。中学時代に、やはり読書家の友人がいて、『水滸伝』なども勧めてくれ、古本めぐりなども教えてくれた。中学2年で松江に転校したが、その頃は西洋文学に熱中し、文庫本で読んだ。しかし松江市の県立図書館は新しい文学書など皆無だったので、そこで図書館にあった井原西鶴など江戸文学を熱心に読み、日本古典文学にのめりこんだのだと言う（金関 1979：56-64）。

これだけ文学に深く傾倒した金関なので、高校を志望するときは自然に文系を志望した。しかし軍人だった父は、金関が理科系に進学することを頑固に主張し、結局父と妥協して医学部に進学した。しかし、金関を医学部に進学するきっかけになったのは、父との妥協以外にチェホフの伝記を読んだことも一因だったという。それは、チェホフが医者でありながら偉大な作家となり、医者であることが偉大な作家たらしめたからというので、理科系ならば医科にしようと考えた（金関 1979：65）

国分は師の金関を評して、生涯一貫してリベラリズムを通したと語っている。幼児洗礼を受けてクリスチャンとしてすごし、トルストイに影響を受けて思春期を過ごした金関の思想は、生涯リベラリストとして変わることはなかった。このことを示す金関の興味深いエッセイに「同窓の害」というのがある。岡山の尋常小学校の同窓生に、太った大柄の同級生がいて、彼が成長して花形力士になった第7代出羽海秀光になった。金関は、それが特に誇りとも思わず、ましては自慢の種ともしなかつた。もう一人印象的な少年で、受け持ちの先生に可愛いがられた佐藤という優等生がいた。金関は「受け持ち先生のペット」という表現をして、大人びたものを書く優等生に、あまりいい印象を持っていなかった。そして年を経て、総理大臣となった岸信介が、かつての佐藤とそっくりの顔で、彼本人かその弟だと思っていた。偶然、岸が出羽海と同級生だということを自慢していることを聞き、同級生の佐藤だと気が付いた。ここから金関らしいのだが、それが分かって、それまでと多少違った目で彼を見直している自分に気がつき、いまましい気になった。金関は政治家なる人間そのものがきらいで、まして岸を善意ある目で見たことがなかったのに、「同窓だからといって好意

をもってたまるか」と力まずにはいられないと、いまいましい気持ちを説明している(金関 1979:2-4)。

岸信介は、傀儡政権満洲国の大臣から、戦争犯罪者として投獄され、その後政治家として歩んで総理大臣になった保守主義を代表する人物である。金関は岸に対する幼少期からの違和感をむき出しにしているエッセイは、金関のリベラルな立場を理解する上で面白い。

また、このことは天皇に対する感情についても言える。戦前の知識人は、基本的に大なり小なり天皇に対する崇拜の念を抱いていると思うのだが、金関はそうした感情が薄い。「天皇と柳田先生」では、柳田国男と金関丈夫の天皇観が対照的に描かれている。1954年の春に、金関は柳田から沖縄調査の参加を依頼され、国分直一、酒井卯作と3人で波照間島を中心に八重山へ出かけた。調査が終わって、研究室の書棚に小さなスクリーンをかけて200枚近いカラースライドを見せた。柳田が最も感動したのは、貧困の忍苦のあとを深く刻みながら、日に焼けた天子ともいような顔をした婦人が労働する姿だった。金関が驚いたのは、柳田がもらった「これは陛下にお目かけなければ」の一言だった。日本の南端の小さな島で、誰にも知られず、こうした貧しい善良な国民が勤勉に働いている姿を是非陛下にごらんになってもらいたい、と言い始めた。その時、金関には柳田が天皇を教育するのは自分の責任だというような意気込みが見え、同時に柳田の天皇に対する愛情を感じた。金関が10月に人類学・民族学の連合大会があるので、その時に上京すると伝えると、学会の最中に宮中で上映することになった。映写機の操作のため、急きょ助手として国分も同伴することになり、国分は少し袖の長すぎる友人の服を借りて参内した。雨の日で、二人とも泥靴で宮中へ行き、スライドを見せた。

退出してすぐに柳田へ報告に行くと、柳田は「どうでした」と聞かれたので、金関は「いや、思ったより不愉快ではありませんでした」と答えてしまった。隣にいた国分は、柳田が何ともいわれぬ顔を見た。後になって、金関は無思慮な返事で柳田を傷つけたのではないかと心配したが、柳田はあくまでも紳士的だったとコメントしている(金関 1978a:86-88)。このように、金関のリベラリズムは信仰と教養に裏打ちされている。天皇に対する柳田の畏敬の念とは裏腹に、金関はそれほどでもなく、皇居での報告会も淡々と語っている点が興味深い。

IV 形質人類学の文化学

金関は、医学部を卒業し、台北帝国大学医学部解剖学教室の教授になった。しかし、台湾大学に寄贈された金関文庫は、台北帝国大学時代の専門雑誌のみで、単行本はほとんどない。金関は、専門書は大学の公費で購入し、自分で購入する書籍は、趣味や興味のある分野だと言っているのも、形質人類学の専門書が少ないのは当然であ

る。また理科系は、情報の新しさが重要なので、古い研究を参照する文科系とは根本的に異なるため、このような考え方は合理的である。

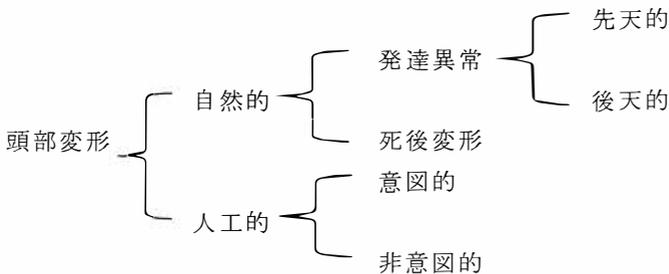
金関が形質人類学的研究で対象としたのは、台湾本島の漢人、平埔族、原住民、さらに台湾以外では南京博物院所蔵の先史時代人骨、河南省安陽殷墟、山東省竜山鎮城子崖遺跡発掘人骨、海南島の漢人、琉球人である（金関 1978b：66）。また生体材料として調査したのは、台湾在住の諸民族で、実際に調査した場所と民族名も明らかになっており、台湾以外では海南島が主要な調査対象である（金関 1978b：69-70）。

金関は、当時形質人類学でオーソドックスな研究方法である生体計測、手紋などを調査している。金関が形質人類学を指導した論文の一覧によると、生体、手及び足の理紋、現代人骨、古人骨、古獣骨、軟部解剖学の分野に渡っている（金関 1978b：342-360）。また古人骨を鑑定するため、考古学や歴史学の知識を踏まえた分析をしており、純粋に医学的な観点での研究とは、かなり様相を異にする。

特に形質人類学が頭形を種族の特徴を示す指標として取り扱われていることに対して、根本的な疑問を提示する研究を展開しているのは興味深い。つまり、頭形を種族の特徴を示す指標とするためには、頭形が生まれついたままの形で保たれていることを前提にしている。では、後天的に外部的要因で頭形に変形が加えているならば、頭形で人種の特定をすることはできない。金関は、あえて頭部の後天的変形の問題に取り組んでいるところに、金関の形質人類学の特徴がある。

金関は、頭部の変形を次のように図式化している。

図1 頭部変形概念図



出典：金関丈夫『形質人類学』3頁

この中で重要なのは、最後の非意図的変形で、次の三種類がある。①幼児における頭部の固定法。②服飾によるもの。③頭上運搬法によるもの。特に最後の頭上運搬法は、従来あまり報告がないけれども、金関は日本の伊豆大島、台湾では広東人やアミ族の女性が用いるような直立して全荷重を頭頂で支える方法や、負載繩を用いて前か

がみで荷重を頭部と背部で分担する方法による頭部の変形に注目している。この運搬方法は、アイヌ、北米先住民、琉球、台湾先住民、フィリピン、メラネシア、オーストラリアの諸民族に広くみられるからである。

図2 アイヌの荷物運搬



金関丈夫『形質人類学』180頁

1938年に金関のグループが実施したタイヤル族の体質人類学調査で、被検婦人に確認を取り、結果として約半数が変形していることが判明した。頭部に変形があれば、頭蓋の形にも同様の変化があると考えねばならず、台北帝大解剖学教室に所蔵する霧社蕃女性の頭蓋骨41個について再検査してみても、負載繩の幅と一致する溝があることを確認した。これによりタイヤル族婦人頭部に負載繩による変形があることを証明した(金関 1978b : 2-16)。

この論文が重要なのは、形質人類学の頭部比較による人種の判定法に、根本的な疑問を投げかけたことである。台湾原住民の調査により、後天的な頭部変形が起きることの着眼点は、台湾へ赴任する前の1928年に、京都滞在中の日高アイヌを男7名女12名の生体を計測した時、頭部に横走する大きな帯状の不毛地帯があることに気がついたからである。これを精査して頭の頂上が陥没していることを確認した。被験者の女性から、7,8歳の少女期より子守をしており、子供を背負うときに、帯状の紐を使い、また子供だけでなく荷物も運んだりしていたと聞いた。これによって頭蓋骨が後天的に変形したことを指摘している(金関 1978b:176-181)。

金関は、後天的頭部の変形に関心を持っていたので、嬰兒の頭を変形させる習慣に注意していた。そして台南を訪問したとき、関廟庄一帯で、幼児を竹の揺りかごの中で長時間仰臥させる育児法だったので、後頭部が扁平になるのではないかと予測していたところ、後頭部の扁平と左右不整形がある子どもを見つけた(金関 1978b : 19-20)。このような人骨に関する関心は、さらに文化的な側面へ広がっている。

台湾の台南台地で縦貫鉄道を建設するときに発見された蔦松貝塚の下顎骨が、国分直一経由で金関のところに鑑定を任された。詳細な測定の結果、下顎骨に人工加工の跡が見え、生前か死後の加工を推定するとき、フィリピン山岳民のポントックとイフガオの変形事例を参照して分析した(金関 1978b : 22-28)。

また骨格の変形だけでなく、変色にも関心を持った。「台湾における人骨鑑定上の特殊事例」では、台湾での人骨鑑定で、実際行われている火葬されていない人骨の着色と変形を指摘している。そこで中国系住民と原住民の葬送儀礼と服飾の知識が十分に生かされている(金関 1978b : 30-)。抜歯と纏足は、金関の医師としての知識が

生かされ、特に纏足を途中で中止した場合は天然の足に近く、纏足の影響が蹠骨の変形だけでなく、下腿骨が顕著に変形していることを指摘しており（金関 1978b: 45）、形質人類学と民俗学の知見を結合した、金関だけしか書けない論文である。

『民俗台湾』に報告した台湾の洗骨の写真による報告書は、解剖学の知識を生かして、骨壺に入れる骨の配列を詳細に記述したもので、古い人骨の判定をするための背景になっている（金関 1978b: 47-64）。人骨収集に関して、解剖学の同僚教授であった森於菟の伝記に興味深いエピソードがある³。解剖学教室の第一期生、大久保正義からの逸話で、解剖学実習が始まるとき、屍体1体に2000円支払ったという。当時、この金額だと豪邸一軒建てることができた。その屍体を扱っていたのは、京都帝国大学系列の満洲医科大学で、満洲国では浮浪人の凍死者をいくらかでも入手でき、それを満洲医科大学がタンクに浸けて保存していた。大学側が金関に申し入れたのは、運搬の目途がつけば無料で譲るといわれたが、船で屍体を運ぶのは、船員のタブーなので難しく、大連汽船と直接交渉して、船員にわからないように仮装して荷造りする費用として、1体につき2000円ほしいと要求された。金関は、教育研究のためには多少の出資などは構わないという信念で交渉し、森於菟は金関を「めげない人」と評価していた（森 2013: 85-86）。

また森於菟の評伝に、もう一つ興味深いエピソードが紹介されている。ある時、台北帝国大学の解剖学教室で、台湾南部の屏東へ行った。その時、農学校のキャンパスをつくるための土地整理の場所で墓を掘り起こしていたら、地元の人から、自殺したきれいな娘さんの墓があり、埋めてから2、3か月しか経っていないと告げられた。それを聞いた台湾人の人夫は、死者の崇りを怖がって掘ろうとしなかったので、金関自らが鍬を手にとって掘り始めた。それを見た弟子たちは、私たちがやるといって掘り始め、まもなくして腐臭ただよう厚い板の棺がでてきた。しかもその棺の中には水がたまっていたのだが、どんなに臭かろうが、腰まで水につかろうが、金関は、その棺にある骨の収集をやりぬき、それを手伝った弟子たちは、金関の骨収集にかける丹念な仕事ぶりに驚嘆した。金関は地上に拾い上げられた骨を一つ一つならべて、学生に「大塚、まだたらないぞ」「大久保、まだたらないぞ」と指示していた。学生は、内心、小さな骨一個くらいいいではないか、と思っていたのだが、金関は最後の骨一本まで固執し、すべてきれいに並べたのだった（森 2013: 88-89）。この妥協を許さない姿勢は、資料の完全性と論文の完成度の高さに反映している。

さて、金関は自分が腋臭や纏足に興味を持つのは、自分が専攻する解剖学、人類学に関連があるためだと述べている（金関 1996: 279）。金関は「蓮の露」という論文で、中国の古典をひも解いて纏足の起源を考証し、完全に形質人類学の範囲を逸脱している。この論文は、纏足関係の研究書を参照しているが、金関の中国史と中国文学の知識を総動員し、中国正史や漢詩を用いて纏足の歴史を考察した歴史学の研究である。それに続く「纏足の効用」は、台湾でおこなった形質人類学の調査経験から、台湾の

墳墓骨を採集して纏足婦人の人骨を分析した結果から、足骨の変化だけでなく、下腿骨も変化しており、さらに大腿骨や骨盤までも変化がみられ、頭蓋や軀幹骨や骨盤が繊細な感じだという。つまり纏足は全身を繊細にするという憶測を述べている（金関 1996：303）。纏足女性は、男性に快感を強く与えると言う俗信にたしては、実証することが難しく、満洲で纏足女性と非纏足女性の腔圧をゴム製気球で測ったが差異はなかった例を紹介している（金関 1996：305）。解剖学の知見と中国の歴史・文学の世界を自由自在に操りながら足の変形である纏足を扱うのは、金関学ともいふべき、専門にとらわれない幅広い研究である。

また髑髏盃のような、一步間違えば好事家の域に入るようなテーマでも、人類学と民族学の知見でエッセイを書いている。「頭蓋尊崇」は原始民族で広く行われるが、死者の頭蓋骨を保存して、一種の霊力を認める風習である。台湾高砂族にも頭蓋骨を取っておく習慣があり、人骨を加工して楽器を作る風習などを紹介している。日本にも『甲子夜話』に、徳川光圀が自分を裏切った家臣を憎むあまり、年月を経た死体を掘り起こし、頭骨に金箔を施して杯にした話が出ている。こうして日本の例を引きながら、「私の研究室にも一つの髑髏盃がある」として、京都の骨董屋から購入したもので、意匠からチベットのラマのものだと考えられると言う。頭蓋骨の特徴からも、その民族の特徴がでていて間違いないと述べている（金関 1982：138-141）。

しかし、この形質人類学専門が思わぬ方向で誤解を生むこともあった。「わきくさ物語」は、戦前に台湾で出版した本であるが、これに収録された論文を、戦後に出版した『お月さまいくつ』に再録している。腋臭についての文学を万葉集からひも解き、ヨーロッパの事例、そして生理学的な解説を加えている。そして腋臭が性的なものであり、いろいろな原始民族の事例を比較している（金関 2008：35～）。

金関は、江戸文学の『咄物語』の話から、鼻と男根の形上の相似があることを、江戸時代の人は強く感じていたという出だしから、台北帝国大学のK教授が、台湾原住民のパイワン族やルカイ族に、男の顔面で鼻である場所に陰茎を刻んだ彫刻があると報告している論文を引用している。この説を、金関は東西の文献から考証している（金関 2008：24-30）。それは決して一般的な書物ではないので、どのように金関がこのような好事家ともいふべき特殊な事例を書いた文献を知り得たのか謎である。

「緬錫」とは、女性を喜ばせる金属製淫具である。金関は、中国と日本の古典から、この使用法や素材と構造などを調べている。さらに欧文の医学書に記された、類似する器具を雑誌「ドルメン」に翻訳を載せている。また揺り椅子は、女性の自慰と関係しており、他にブランコの少女は目に見えぬ神と交わる象徴だとして、ブランコに乗った少女の絵画を分析している（金関 2008：10-12）。このように、性的なテーマから、好事家が好むような領域についてもエッセイを書いていることから、現在の観点からは人権意識云々という感想が若い人たちから出てくるのである。

金関は、さらに形質人類学という専門が、変な形で誤解を生んだ事件を紹介してい

る。京都の人文科学研究所で人類学会があったとき、初対面の桑原武夫から、開口一番「君はけしからん、人類学ともあろうものが」と罵倒された。桑原は、日本女性の代表的タイプに祇園の芸者の写真をトロカデーロ人類学博物館に提供したことを立腹していた。金関は突然のことで驚いたが、思い当たることがあったので、そのまま弁明をした。その翌年の人類学会で、会長の渋沢敬三氏から、「トロカデーロで里代に逢ってきたよ」とご機嫌な様子で言われた。この里代は祇園の芸者だった。1934年に金関がヨーロッパに赴くとき、友人の人類学者であった三宅宗悦から祇園の芸者、舞子のプロマイド4、50枚を餞別でもらい、知り合った人たちに進呈して、最後に残った写真をトロカデーロ民族学博物館の女性事務員に渡した。金関は、学会で出会った人たちが選ばずに残った写真の中に、当時祇園の一番人気だった里代の写真があり、これが日本女性の人種的タイプの代表として、トロカデーロ民族学博物館の人類学者が選んだことを、金関は面白いと思っていた。その後、国際人類学会が開催されて、金関もトロカデーロの人類博物館に行き実物を見ると、その写真の下に「カナセキ教授提供」と書き添えられていた。農民や漁民の風俗をした男女のタイプが並んでいて、この祇園の舞子の写真を見て、最初は桑原のように、そんなつもりで提供したのではないと抗議しようと思ったが、徐々に渋沢のように、向こうが勝手にやっていることだからいいじゃないか、という気分になったと書いている（金関 1979：248-251）。

V 海南島経験

1938年、日本軍の海南島占領にともない、軍政から民政に移管した時、海南島の総合調査が企画された。台湾総督府は、第二の台湾とするため、積極的に調査団を結成して調査を実施した。金関は調査に2回赴いており、台湾に渡ってきた大陸文化の影響を中国南部とベトナムに関心をむけていた金関は、この海南島の調査がきわめて印象的だったようだ。

具体的には、1942年4月に海軍特務部の依頼で、金関は石碌鉄山で漢族と黎族の体力比較の調査をしている（金関 1942a）。この時の見聞を、金関は『民俗台湾』に寄稿しているが、この中では、言語や民俗調査の様子を書簡で伝える形式で発表している（金関 1942b：2-4）。金関の報告書も含まれている一連の海南島駐留の海軍特務部報告書を見る限り、1942年は海南島在住漢族の言語・教育や、先住民である黎族の移住調査を行った（海南海軍特務部政務局 1942a、1942b、1942c、1942d）。また黎族の調査地帯は、鉄鋼石を産出する石碌鉄山の付近で、この調査は鉱山開発のため、付近に住む黎族の状況を把握するために要請されたと考えられる。

金関は『海南島漢族及び黎族ノ體力比較ニ關スル調査報告書』（金関 1942a）という報告書を書いている。金関の海南島に関する論考は、「鶯歌窯の捲上式製陶法」「海

南島覚え書」「三亜街の回教徒」「瓊海雑信」「海口の散歩」がある。金関は黎族の一部に捲上式土器⁴を作っている技術があることを知り、それが工業化された商品として大量に制作利用されていることに驚いている（金関 1977：95）。また、専門の論文だけでなく、海口の町中を散策したときの随筆を書いており、看板にある「掌紋」という字に誘われて占い師の部屋に入ったことなど、詳しく記している。そのころ金関は手紋の研究もしていたことも関係しているが、占い師と筆談でやり取りしており、漢文で会話が成り立っているのです。金関の漢文を書く能力もかなり高かったことが窺われる（金関 1977：129）。

海南島の報告書は、ほぼ軍隊の情報に頼っている。例えば、「海南島重合盆地ノ黎族」の報告書は、海南島の1941年11月調査書類（保平派遣調査隊、宝橋分遣隊所属）に報告された各集落の耕地面積を用いており（金関 1978b：130）、重合盆地の住民に関する統計数字も、軍隊の報告書からとっている。さらに各集落の種族構成、姓の戸数、男女数、家族員数、家族構成、通婚関係などは、戸口簿から算出している。金関自身の調査は、保健状態と身体測定をしているが（金関 1978b：151-153）、報告書の大半は軍関係の情報であり、またこの報告書自体が、海南島特務部第一調査課の委嘱で1942年4月から6月にかけて遂行された海南島黎族の人類学的調査報告の一部だと断っている（金関 1978b：153）。

『南方文化誌』には、海南島に駐留していた横須賀鎮守府四特別陸戦隊の収集した故事伝説集を翻刻している。金関は「この時期に、このような作業が、何の目的で行われたかは明らかではないが、当時の総司令横田海軍少将の命によるものであることだけは、私のノートによって判明する」と書いている（金関 1977：283）。

台湾大学に所蔵されている『風俗習慣古事伝説集録』（昭和17年4月）をみると、金関文庫ではなく楊雲萍文庫所蔵であり、『故事伝説集録』（昭和16年7月7日）だけが金関文庫の所蔵になっていた。このことから、金関が海南島で収集したのは後者のみで、前者は戦後、金関が台湾を訪れたときに、戦前より面識のある楊雲萍から借りて翻刻したのではないかと考えられる。これも、金関が著作で言及しているノートを確認すれば、明らかにできるであろう。

後者の報告書をもとに、さらに詳細な聞き取りの記録をまとめたのが前者である。この両者の構成を比較してみる。

I 『故事伝説集録』

- 1 各地名の由来
- 2 黎人ノ伝説
- 3 伝説
- 4 迷信

II 『風俗習慣古事伝説集録』（昭和17年4月）

- 1 言語
- 2 故事伝説(1)地名ノ由来伝説、(2)住民ノ由来伝説、(3)鳥獸ノ伝説
- 3 名所旧跡
- 4 風俗習慣(1)衣食住、(2)慶弔事、(3)諸行事
- 5 迷信

故事伝説の地名や住民の由来について、前者を詳しくしたのが後者であることは、その記述を見てわかるが、前者の「黎人ノ伝説」について、後者の報告書では省かれている。迷信についても、前者を基礎に、後者はさらに詳しい記述となっている。

また、この翻刻の解説に、次の6点の報告書の名前だけが記されている（金関 1977：283）。

- 1 黎人関係報告書類 横四特、昭和16・7・25、北黎警察隊長上田光雄編
- 2 黎人風俗誌 宝橋警察管轄内石碌分隊 昭和17・1・24、中里朝市編
- 3 黎人に関する調査票 東方分遣隊
- 4 黎人に関する調査事項 高石分遣隊、佐藤兵曹長編・及川兵曹長編・遠藤親雄編
- 5 海南島故事伝説集（澹県・臨高県） 昭和16・9、海軍坂田部隊編
- 6 統計書類 昭和16・9、宝橋分遣隊

金関が疑問に思っているように、なぜに軍隊がこのような民族誌的情報を収集したのか判然としないが、占領統治のための基礎作業として、こうした民間伝承や地元の歴史を把握する必要があったのだろう。

海南島調査は短期間であったが、金関にとって海南島での経験は、その後比較の対象としてしばしば言及されている。金関は、この時の海南島漢族の生体調査から、「大陸における今日の福建人、広東人が果たして中国人そのものであるか」という疑問を提起している（金関 1978b：114）。また、1943年に海南島北黎付近に駐屯中の軍通訳から、黎族にも陰牙（性器に歯が生えている）をもつ女の話があると聞いた（金関 1996：266）。金関は、それまで関心があるテーマについて、最大限に情報網を広げ、戦後に書いた論文の中に、さりげなく海南島の民族誌的情報を比較対照する事例として挙げている。そして女性の入れ墨の紋様について書いた論文にも、冒頭で海南島黎族の調査経験を述べ、唐の鑑真和上が日本への渡航中海南島に漂着して、海南島の風習を伝記に書いていることを調べており（金関 1982：149-151）、海南島の文献資料は、戦後も継続して注意を払っていたことをうかがわせる。

海南島に関する文献研究が、布の染色技術に関する考察で生かされている論文もある。それは、染色する前の糸を括って素地を残し、その糸を織って布に素紋を作ったものを日本では緋（かすり）というが、この技法はイカットといい、東南アジアに広

く分布し、フィリピンと沖縄にあって、台湾でも発見された。中国では古来この技法はないと考えられていたが、海南島の黎族にはこれを筒状に織ってスカートにしている。宋の楽史の『太平寰宇記』を見ていて、海南島万安州の風俗に女性のスカートに関する袋状の布を斑布と記していることを発見している。三国時代の魏の景初2年に倭国人が「斑布二匹二丈」を魏王に献上し、この「斑布」が何かは、日本の学者でまちまちだが、かすりと関連させて考証したものはない。『魏志』の「斑布」と宋代の「斑布」の異動を明らかにできないが、それが同じだとすると、日本へのイカットの技術が伝来したと考えられると展開している（金関 1980b：124-125）。

また、海南島に調査へ赴いた時に、時間が足りなかったのか、あるいは治安が悪かったのか、実際自分で見るができなかった、女性の頭髮がだれも赤い「紅毛黎」の集落があると聞いて、その情報を集めている。その集落では、どの軒先にも素焼きの壺がさがり、底に藁を敷いて灰と川ニシの貝を焼いて作った石灰を入れ、それに水を入れた灰汁シャワーを3、4日おきに浴びているので、アルカリで漂白されて女性の髪が赤くなるのだと言う。海岸地方を離れると黎族はピンロウを噛まないが、女性が歯を染めている部族もあり、白い歯は犬のようだと行って軽蔑されるのだという（金関 1982：152-153）。こうした情報も、海軍の関係者からもたらされたと思われるが、断片的な情報でも貪欲に集めていた様子が窺える。

また黎族の踊りは田植えや収穫祭のときにやる躑躅があり、宴会後に、よっぱらった男性同士が、お互いに悪口を言いながら棍棒や素手で殴り合うという。金関が海南島滞在中は見なかったが、実際見たのは、戦後になってからフィリピンでバンブーダンスを見て、海南島の黎族の踊りを推測している。バンブーダンスは、女性が早く動かす竹に足を取られないよう男性が踊り、酒を飲みながらも最後まで踊った男性は女性の人気の的になるという（金関 1982：157-158）。

VI 沖縄への愛着

沖縄に対する深い愛着は、「あの美しい綾の大路を歩いて、今一度守礼の門を仰ぐことができなかつたら、私の後半生は不幸な半生であろう」と、戦争で破壊された沖縄の記念物の復興を熱望していた（金関 1978c：10）。これは、最初バジル・ホルの『大琉球島航海記』の翻訳に寄せられた文章だが、沖縄の人たちを大変感動させたという（中村 1987：288）。

金関が沖縄研究を始めたのは、形質人類学の指導教授の足立文太郎から、琉球人の体質人類学の必要性を勧められたので、彼は喜んで従い、1928年に帝国学士院から研究費を補助されたのをきっかけに、足立から琉球人の人骨を蒐集せよと命じられて沖縄を訪問したのが最初である（金関 1978c：184）。

1929年に金関が沖縄を初めて訪れたときの詳細な日誌は、『琉球民俗誌』に公表さ

図3 沖縄の組踊とその衣装



(上) 塩間節『琉球芸能全集』鳥袋盛敏著より
(下) 脚絆

金関丈夫『木馬と石牛』174頁

れている。金関は、サンプルとなる新旧の人骨を求めて、那覇では県庁学務課、図書館、考古学愛好家、病院、学校などを訪ねている。また実際に人骨を収集するため、山原の百按司墓や瀬長島洞窟、那覇市内の行路病屍集収所を訪問している。戦前の沖縄で形質人類学者や地方史研究者との交流から、当時の沖縄学術界の様子が記録されている。さらに貴重なのは、熱心に沖縄の劇場へ通い、当時の沖縄芝居の上演風景、著名な俳優の儀保松男との交友、演目などを詳細に記録していることである。熱心に沖縄芝居を見たことは、単なる趣味に終わらず、組踊りの舞台衣装で用いた脚絆の意匠を台湾原住民の女性が畑仕事で使う脚絆や、海南島黎族の織布、『球陽』や『水滸伝』に見られる脚絆の記述と対比させて、意匠のパターンとか色彩感覚を論じている（金関 1996：173-180）。

戦後の沖縄研究再開は、柳田国男の企画した「南島文化の総合研究」で始めた波照間での調査である。柳田の天皇観のところで前述した金関が柳田に見せた沖縄南端の島とは、この波照間島の写真である。この島に調査へ行ったとき、国分直一は「金関教授は油絵の強烈なタッチを思わせる風景の展開に目を見張って、ゴッホだ、ゴッホだ、と感歎の声をあげていた」と語るように（中村 1987：287）、金関は波照間に惚れ込んでしまった。そして調査を始めると、島の住民は、戦時中の強制疎開でほとんどがマラリアに冒され、住民の30%が死亡し、その後100人増加したけれど、戦後の人口は1200人にすぎない状況に深く同情した。

波照間島に調査団が着いた時は、水田の作付けが終わった時期なので、金関が分担する人類学班は島民の体質調査をしようとした。しかし昼間の往復時間を入れた30分の時間を取ってもらうことが、島民にとって非常に困難で、彼らが1分の余裕もないほど多忙な生活をしていることを実感した。生活苦は考古学班の調査からも、乏しい土を耕し始めた人たちが残した貝塚からも、おびただしい石器が出てきて、長い年月、ジャングルを次第に切り開いて島の中央部まで耕地を広げたことを示していた（金関 1978c：37-38）。

はたして金関は、この時、住民に無理して時間を割いてもらい、生体調査を行ったのだろうか。「八重山群島の古文化」という論文で、八重山地方人の体質についてという部分に与那国（121）と波照間（107）のデータがあり、波照間は自分で、与那国は自分の門下生の和田が計測したとある。利用した計測は頭最大長、頭最大幅、頭長

幅指数、頬骨弓幅、鼻幅、身長の6項目で、各項目の偏異係数で除した関係偏差を比較すると、与那国と波照間の男性は、南島群から南九州の地方群と類似性が近く、これより北の九州人とは類似性が少ないと結論している（金関 1978c：128）。

つまり、住民にお願いして計測したのである。しかし必要最小限度にとどめ、その代わりに労働風景を写真に撮り、その厳しい労働環境を表現したかったのだろう。だから柳田は、厳しい生活環境にもかかわらず勤勉に労働する姿に感動し、天皇に見てもらおうと言い出したのだ。そこには、波照間の住民への共感があった。それだけに止まらず、波照間島の山羊小屋と見間違えるほど哀れな図書館を見学し、リーダーズダイジェストしかなかったので、気の毒に思って読み古した本を送ったのである（金関 1978c：39-42）。調査地で、あくまで現地の人々を調査対象として見るのではなく、彼らの精神生活を豊かにすることは何かを考えた人物だということがわかる。

沖縄の文化復興について、蔵書を沖縄に寄贈したところで前述したが、「郷土史収集への提案」というエッセイで、沖縄政府や沖縄図書館が、熱心に沖縄関係の本を集めるための提言をしている（1979：181）。また「沖縄古文化財の保護についての私見」でも、戦争の被害を受けた沖縄の古い建造物を写真や見取り図で復元したり、戦火を受けなかった八重山の旧家の土族屋敷を保護することを呼び掛けたりしている（金関 1979：183）。金関の提案が、果たして沖縄文化財の復興にどれだけ影響を与えたかは分からないが、ゴッホの絵のような自然を愛し、沖縄の演劇に深い造詣を持つ金関は、沖縄戦での文化財の被害に心を痛め、その復興を願い、また具体的に資料の収集を協力した。

Ⅶ 金関丈夫の知的財産

台湾大学に所蔵されている金関文庫は、文学と歴史の基本資料が大変多く、これが形質人類学の専門家の蔵書かと驚かされる。金関は、1925年から36年まで京都帝国大学解剖学教室の万年助教授をつとめた。その間、台北帝国大学の教授として転出する1936年まで、歴史や文学の古典、美術や音楽の本までむやみに購入し、京都時代からの本屋の借金完済は1944年までかかったと書いている（金関 1979：52-54）。

文理一体の総合大学に勤務し、身近に歴史、考古学、文学の専門家がいたので、文人としての総合的知識で専門を超えた知的ネットワークを構築し、そこから研究への着想を得ている。台北帝国大学時代は、文政学部の土俗・人種学教室の移川子之蔵や宮本延人など、『民俗台湾』や『南方土俗』を主宰するグループとの付き合いもあったが、同時に沖縄の研究者とも交友があった。

戦後、金関が台湾から苦勞して持ち帰った資料の中に『村岡伊平次伝』がある。これについて、「ある伝記の男」というエッセイを書いている。この伝記は、島原の「からゆきさん」の裏面史である。金関は、この「伊平次日記」を九州大学の同僚の森克

己に渡した。彼は島原へ出かけて事実を集め、この日記の真实性を裏付けた。伊平次日記の中で、シンガポールで女郎屋をしているときに、外遊途中の伊藤博文が一夜の歓待を受けて「汝の如きは日本の海外発展の功労者である」という激励を、この女子誘拐者の親方に与えたと書いてあった。それを森克己の『人身売買』では省いていたので、その点の不满を言うと、森はその年に伊藤が外遊してシンガポールを通過した事実がなかったから省いたと答え、金関は歴史家の用意周到さに改めて感心したと書いている（金関 1980b : 179）。

VIII おわりに

金関は、台北帝国大学に赴任した1936年から、留用されて勤務した台湾大学を1949年まで務めた14年間、台湾に滞在した。帰国した翌年には九州大学医学部に赴任したが、その当初は、台湾での仕事をまとめて、新しい仕事はやらなくてもいいかと考えていた。日本人の祖先を論じた従来の学説が古人骨の人類学的研究に基礎を置き、その古人骨のうち縄文時代の人骨は全国に渡って発掘され調査されているが、弥生時代の人骨はほとんど調査されず、材料なしに架空の議論をしていた。しかし九州大学に来てみると、弥生人骨があるので、台湾を後継者にまかせて、自分は弥生時代の古人骨を研究することにした（金関 1979 : 14）。そして、日本民族の起源について、独自の説を唱えていく。

金関丈夫研究を進めるための今後の課題として、著作の元になったフィールドノート、日記、そしてできれば古美術や骨董品などのコレクションを参照する必要がある。フィールドノートは、「八重山の民家」という小論に、書簡という形式で、八重山のフィールドノートの一部をまとめている（金関 1978c : 20）。最初の沖縄旅行の紀行文は、当時の日記を元に、後に文献資料を加えて執筆しており、巧みなスケッチも、挿入されていると考えられる。そして、古文書や民芸品も、台湾で収集したコレクションは、カーに寄贈され、アメリカでも展示会が開かれるほどのものだから、戦後の収集した品も、金関の鑑識眼で集められたという意味で十分価値がある。

『文芸博物誌』には、金関の骨董コレクションに、江戸時代の草書体で書かれた書状を紹介している。金関は、これを解読した上で、その歴史的意味や社会経済史的な分析を展開しており、単なる骨董趣味ではないでも、的確に文字を読み、その文化的背景をも含めた分析をしているのは、素人の領域を超えている（金関 1978a）。

台北帝国大学の同僚で、『民俗台湾』でも一緒に仕事をして、戦後も台湾大学に留用された仲間だった中村哲は、かつて金関に彼の問題意識の広さは何に由来するかと尋ねたことがあった。その時、金関は、旧制高校の寮生活にあると答えたそうだ。中村は、その答えから、三高時代の多くの友人から知的刺激を受け知識を競い合った雰囲気、金関以外にも、この世代の研究者が博識なのだろうと感想を述べている（中

村 1987:283)。金関丈夫の孫娘の金関ふき子氏によると、「祖父はレオナルド・ダ・ビンチに憧れ、その感覚に共感していたのではないか、それに近い視線で人間を見ていたのではないか」と語られた。金関は、医学を通じて「人間とは何か」を問い続け、総合人類学の系譜を受け継いだ知の巨人である。それは、現在細分化が進んだ文化人類学の限界を乗り越える、一つのヒントになるかもしれない。

付記

本稿は、台湾大学図書館に創設された国分直一文庫に続いて、金関丈夫の蔵書が寄贈されたことを記念して、同図書館が主催した「金関丈夫教授図書寄贈記念展・跨領域的南方考古学交際研討会」(2013年5月17日)の招待講演で発表した原稿に手を加えたものである。講演には、金関丈夫関係者も多数出席され、特に三男の金関恕氏(1927-2018)からは、講演会終了後も自宅に残された金関丈夫のフィールドノートなども見せていただき、貴重なアドバイスをもらった。この時のシンポジウムは、いずれも充実した発表だったので、是非論文集にしたいと申し入れたが、現在の出版事情では難しく、論文集の刊行は実現できていない。金関丈夫の遺志通り、金関恕氏も九州大学医学部に献体するそうで、祖父・父・自分の三代が並ぶことになる。台湾で父の考古学発掘から考古学を目指された金関恕氏は、いわば金関丈夫のやりたかった分野を正当に継承した子息と言える。謹んで哀悼の意と感謝を表したい。

本稿の校了まぎわに、松島泰勝『琉球 奪われた骨:遺骨に刻まれた植民地主義』(東京:岩波書店、2018年)があることを知った。この著作金関の今帰仁百按司墓の人骨収集を厳しく糾弾しているが、本稿では検討する余裕がなかった。

注

- 1) 近年の金関丈夫批判は、ポストモダニズムの潮流に乗って、植民地研究全般を批判するなかで展開されている。小熊英二は、『民俗台湾』をめぐって皇民化教育に抵抗した民俗研究という正当化を批判している。また腋臭や纏足など、身体的なセンシティブな問題を題材にしたことを差別観の表れとして批判している(小熊 2011)。
- 2) カーは1947年から1949年にワシントン州立のワシントン大学、1949年から1950年までスタンフォード大学とカリフォルニア大学バークレー校で日本史講師を務めた。その後5年間はフーヴァー戦争・革命・平和研究所所属の研究員に就任した(沖繩公文書館 2011:7)。
- 3) この評伝は、森於菟の長男が書いている。
- 4) 粘土を丸い棒状に練りのばし、あらかじめ作って置いた円形の底の縁部に沿って螺旋状に巻き上げて側面を作っていく手法。

参考文献

Bert A. Gerow

1952 *Publications in Japanese on Korean Anthropology: A Bibliography of Uncatalogued Materials in the Kanaseki Collection, Stanford University Library*. Stanford University.

安溪遊地・平川敬治（編）

2006 『遠い空——国分直一、人と学問』海鳥社。

海南海軍特務部政務局

1942a 『昌感地方ノ開拓ト言語分布ノ由来』民族調査資料1輯。

1942b 『旧海南島社会ニ於ケル官人群ト教育制度』民族調査資料2輯。

1942c 『重合地方ニ対スル黎族ノ移住ニ就テ』民族調査資料3輯。

1942d 『大岐黎ニ関スル諸問題』民族調査資料4輯。

金関丈夫

1931 『日本の人種学』岩波書店。

1938 『南支南洋の人類相』台北帝国大学。

1942a 『海南島漢族及ビ黎族ノ體力比較ニ関スル調査報告書』黎族及其環境中間報告第3輯。

1942b 『瓊島雑信』『民俗台湾』2巻6号、pp. 2-4。

1943 『胡人の匂ひ』東都書籍。

1975 『発掘から推理する』朝日新聞社。

1976a 『日本民族の起源』法政大学出版局。

1976b 『木馬と石牛』角川書店。

1977 『南方文化誌』法政大学出版局。

1978a 『文芸博物誌』法政大学出版局。

1978b 『形質人類学』法政大学出版局。

1978c 『琉球民族誌』法政大学出版局。

1979 『孤燈の夢——エッセイ集』法政大学出版局。

1980a 『南の風——創作集』法政大学出版局。

1980b 『長屋大学』法政大学出版局。

1982 『考古と古代——発掘から推理する』法政大学出版局。

1996 『木馬と石牛——民族学の周辺』角川書店。

2006 (1975) 『発掘から推理する』岩波書店。

2008 (1980) 『お月さまいくつ』法政大学出版局。

金関丈夫・国分直一

1979 『台湾考古誌』法政大学出版局。

金関丈夫・忽那將愛（監輯）

1942 『台北帝国大学解剖学第二講座論文集』第5冊。

金関丈夫博士古稀記念委員会（編）

1968 『日本民族と南方文化』平凡社。

清野謙次・金関丈夫

1928 『人類起源論』岡書院。

熊本大学文学部考古学研究室（編）

1996 『滄海を駆ける——国分直一先生の軌跡』熊本大学文学部考古学研究室。

森常治

2013 『台湾の森於菟』宮帯出版社。

中生勝美

2012 「戦時中における国分直一の台湾研究——オラルヒストリーから」『国際常民研究機構年報』4：pp. 181-209。

中村 哲

1987 「解説」金関丈夫『琉球民族誌』法政大学出版局。

沖縄公文書館

- 2011 『ジョージ・カー文書』 沖縄公文書館。
 小熊英二
 2001 「金関丈夫と『民俗台湾』——民俗調査と優生政策」『近代日本の他者像と自画像』 篠原徹（編）、
 pp. 24-53、柏書房。
 横須賀鎮守府四特別陸戦隊
 1942 『風俗習慣古事伝説集録』（台湾大学特蔵部楊雲萍文庫539.12/7721）。
 1941 『故事伝説集録』（台湾大学特蔵部金関丈夫539.531/4852）。

『回覧雑誌』 一覧

国分直一執筆分

- | | | | |
|--------------|---------------|-------------------|------------------|
| 一、 花果 | かか | (一九四六〔民国三五〕年七月九日) | 郷愁記 |
| 二、 如意 | にょい | | |
| | 全三冊 | (一九四六年八月二五日) | 離愁 |
| 三、 雙魚 | そうぎょ | (一九四六年九月二五日) | 棉の木のある学校 |
| 四、 無絃 | むげん | (一九四六年十一月四日) | 山日記 (國分一子) |
| | 全三冊中二・三分冊欠 | | |
| 五、 太太 | たいたい | (一九四七年一月) | 兵隊記・ムロラフ・ピヤナン鞍部越 |
| 六、 紅玉 | こうぎょく | (一九四七年二月二五日) | 第一分冊 幼年時代 |
| | 全四冊 うち、三・四分冊欠 | | 北安曇の山々 |
| | | 第二分冊 | 親代の記 |
| 七、 踏青 | とうせい | | |
| | 全二冊 | (一九四七年三月) | 幼年時代 (第二回) |
| 八、 海燕 | かいえん | (一九四七年八月) | 国分原稿なし |
| 九、 Minotaure | ミノトール | (一九四七年九月) | 国分原稿なし |
| 一〇、 青銅 | せいどう | (一九四七年十一月一日) | 変貌しつゝ、あるヤミ |
| 一一、 茄苳 | かとう | (一九四七年) | 蘭嶼紀行 (第一回) |
| 一二、 冬扇 | とうせん | (一九四八年二月) | 蘭嶼紀行 (二) |
| 一三、 扇状地 | せんじょうち | (一九四八年三月二六日) | 国分原稿なし |
| 一四、 刺桐 | しどう | (一九四八年五月) | 国分原稿なし |
| 一五、 小集楽 | おずめ | (一九四八年一〇月二〇日) | かへるかえらんの記 |